

# 新『教会通信』(2019年1月)

☆(聖書に今日を聞く)☆

伊豆イエス之御霊教会

牧師 三崎 紘

伊東市十足324-37

TEL 0557-45-3692

FAX 0557-45-7081

<http://izukogen.wonderful.to>

◎『起きよ 光を<sup>はな</sup>発て 汝の光きたりエホバの栄光

汝の上に照り出でたればなり

視よ 暗きは地を覆い 闇はもろもろの民を覆わん

されど汝の上にはエホバ照り出で給いてその栄光 汝の上に<sup>あらわ</sup>顕るべし』

(イザヤ書第60章1.2節)

ハレルヤ!

此の教会通信に触れておられる皆様方は、上記イザヤ書の<sup>みことば</sup>聖言をどのようなお気持ちで拝読なされるのでありましょうか?

私は毎年、歳末から年頭にかけて何故か此の<sup>みことば</sup>聖言に引き寄せられて、文中の“汝”を“お前”と置き換えて幾度か繰り返して拝読致します。

イスラエル(ユダヤ)の民に対してでは無く、現在の自分に宛てられた神からのメッセージとして受け止めて声を出して拝読しておりますと、気持ちの良い地声の響き<sup>ひび</sup>が神の御声<sup>みこえ</sup>のように伝わって参ります。

最後には必ず“アーメン”、と口を突いて出て参ります。

上記イザヤ書第60章1.2節以降3節からを拝読致しますと、多分にイスラエルと<sup>こうえき</sup>交易があった地名などが<sup>ひんばん</sup>頻繁に出て参ります事から察しますと、イスラエルに関する預言の文章である事も事実であります、此の60章の後部19節20節

◎『昼は日再び汝の光とならず 月もまた<sup>かがや</sup>輝きて汝を照らさず

エホバ永遠に汝の光となり 汝の神は汝の<sup>さかえ</sup>栄となり給わん

汝の日は再び落らず 汝の月は欠くる事なかるべし

そはエホバ永遠に汝の光となり 汝の悲しみの日<sup>おわ</sup>畢るべければなり』

“アーメン”、“アーメン”であります。

此の文章は、ヨハネ黙示録第21章23節や同じく黙示録の第22章5節等の<sup>みことば</sup>聖言を示唆しており、新しき<sup>せい</sup>聖なる都エルサレムの<sup>じょうけい</sup>情景を<sup>あらわ</sup>顕したもので、※『<sup>こひつじ</sup>仔羊の<sup>いのち</sup>生命の<sup>ふみ</sup>書に記された者』(21章27節)、更には※『<sup>よよ</sup>世々<sup>かぎ</sup>限りなく王たるべし』(22章5節)との記述は、私たち“水と霊のバプテスマ”に授かっている者に対する神からの<sup>せいやく</sup>確実な誓約事項であります。

又、此のイザヤ書第60章18節には、イスラエルが<sup>しゅうへん</sup>周辺国との<sup>こうきゆうてき</sup>恒久的とも言える永き戦いに終止符が打たれる事が記されております。

◎『<sup>あらび</sup>強暴の<sup>そこない</sup>こと<sup>やぶれ</sup>再び<sup>さかい</sup>汝の<sup>いしがき</sup>地に<sup>とな</sup>聞こえず<sup>ほまれ</sup> 残害と<sup>とな</sup>敗壊とは  
再び<sup>ほまれ</sup>汝の<sup>とな</sup>境に<sup>とな</sup>聞こえず<sup>とな</sup> 汝その<sup>とな</sup>石垣を<sup>とな</sup>救いと<sup>とな</sup>称え  
その<sup>とな</sup>門を<sup>とな</sup>誉と<sup>とな</sup>称えん』

間違い無く、世界中に散らされていたユダヤ民族は続々とイスラエルに戻って来て(エゼキエル28:25, 26及びエゼキエル38全章を拝読されたし)、やがて周辺国とは平和条約が結ばれ、人々は平和を満喫している状態が表わされております。そして、それは新約聖書へと繋がります。

◎『人々の平和無事なりと言うほどに、  
<sup>ほろび</sup>滅亡に<sup>ほろび</sup>わかに<sup>ほろび</sup>彼らの上<sup>ほろび</sup>に来たらん。  
<sup>はら</sup>妊める<sup>おんな</sup>婦に<sup>うみ</sup>産の<sup>くるしみ</sup>苦痛の<sup>のぞ</sup>臨むが<sup>かなら</sup>ごとし、<sup>のが</sup>必ず<sup>え</sup>遁るるを得じ。  
<sup>やみ</sup>されど<sup>お</sup>兄弟よ、<sup>やみ</sup>汝らは<sup>お</sup>暗に<sup>お</sup>居らざれば、  
<sup>ぬすびと</sup>盗人の<sup>お</sup>来ると<sup>お</sup>く其の<sup>お</sup>日なん<sup>お</sup>じらに<sup>お</sup>追及<sup>お</sup>くこと<sup>お</sup>なし。』

(テサロニケ前書第5章3, 4節)

文中、にわかに起こる滅亡とは、神を知らぬか神に逆らう者達に対する出来事であり、私たちに取っては待ちに待った主の御再臨であります。

故に、旧約聖書とは言え此等の聖言は、新約の時代に生きる我らにも宛てられた預言の書でもであると確信して、私は正に我が物顔で拝読させて頂いております。

今一度冒頭の聖言を噛み締めて参ります。

◎『<sup>お</sup>起きよ<sup>ほな</sup> 光を<sup>ほな</sup>発て<sup>ほな</sup> 汝(お前)の<sup>ほな</sup>光きたり<sup>ほな</sup> エホバの<sup>ほな</sup>栄光  
汝(お前)の上<sup>ほな</sup>に<sup>ほな</sup>照出<sup>ほな</sup>で<sup>ほな</sup>たれば<sup>ほな</sup>なり』(イザヤ60:1)

※神を信ずる者よ、起ち上がりなさい。その光を発つのだ。

神のご栄光がお前の上に煌々と照り輝いているではないか！

その御光が何の為にお前の上に輝いているのか、

その事を充分に辨えてお前が起ち上がって一人でも多くの者達に知らせるのだ。

◎『<sup>み</sup>視よ<sup>くら</sup> 暗きは<sup>おお</sup>地を<sup>やみ</sup>覆い<sup>もろもろ</sup> 闇は<sup>おお</sup>諸々の<sup>おお</sup>民を<sup>おお</sup>覆わん  
されど<sup>お</sup>汝(お前)の上<sup>お</sup>には<sup>お</sup>エホバ<sup>お</sup>照出<sup>お</sup>で<sup>お</sup>給いて  
その<sup>お</sup>栄光<sup>お</sup> 汝(お前)の上<sup>お</sup>に<sup>お</sup>顕<sup>お</sup>る<sup>お</sup>べし』(イザヤ60:2)

※神を信ずる者よ、禱りの中に霊眼を開いて世界全体を視よ。

世界中が暗闇に覆われているのが解るであろう。

しかし神様が、お前の上には全幅の信頼を置いて全真理を与えているのは何の為だ。

神はお前が神の今後の計画(ご経綸)を多くの者に知らしめる事を願っておられる。

私(筆者)に取りまして此の冒頭の聖言は、年毎にその内容に重み加わり、御救いに与っている我らと一般的世間との間に、歴然とした隔たりの壁面が年毎に厚みを増して行くように感じられて参ります。

確かに人間的文明は刻一刻と進展を見せており、取り分けIT全盛時代を迎えて人類の生活様式は大きく変化致しました。

更に今日、AI(人工頭脳)の分野でも、各方面に目まぐるしい開発が見られ、人々の生活環境にも変化を与えつゝあるようですが、これらの分野が果たして人類全体の本当の至福に繋がるとは思えません。

神に依って選ばれて、国籍までもが既に天に記されている(ピリピ3:20)我々は、本物の至福つまり真の祝福と恩恵が何処から来るかを識っている者達であり、決して人間(肉)的頭脳の発展によって永遠の祝福へ導かれる者ではありません。

しかし神を識らぬ者達は、此の地球が住み難い状態になったら、他の惑星を改良し其処を地球化して住まうと言う宇宙移動計画(テラフォーミング)なるプランが、本気で学者の間で議題に登っていると。

人間の智慧は、確かに一時的には人類に役立つ希望を与えますが、プラスチックや原子力の発明や発見が、果たして人類愛や恒久的平和に役立っていると言えるでしょうか。

さて、私たちの神・主イエス様は“愛”そのものの御方であられます。

此の新年の始めに当たり、神が私たちに求めてお出での“愛”に付いて聖霊様(イエス之御霊様)のお導きを頂戴しながら少しく筆を進めて参ります。

◎『愛というのは、我ら神を愛せしにあらざり、神われらを愛し、その子を遣して我らの罪の為に宥の供物となし給いし是なり。愛する者よ、斯くのごとく神われらを愛し給いたれば、我らも亦たがいに相愛すべし。』

(ヨハネ第一の書第4章10.11節)

私たちの神は、天と地との有りと有らゆる物をお創りになられた御方であり、現在も今後永久に総てを管理なされ運営なされる唯一・全能の神様であられます。

その神様には、一人の御子が在られます。

◎『彼(御子)は見得べからざる神の像にして、萬の造られし物の先に生まれ給える者なり。』

(コロサイ書第1章15節)

此の聖言を証する旧約聖書の聖言が、箴言第8章22節以降に詳しく記録されております。

◎『エホバいにしえ其の御業をなしそめ給える前に  
その道の始として我を造り給いき  
永遠より元始より地の有らざりし前より我は立てられ  
未だ海洋あらず未だ大なる水の泉あざりし時我すでに生れ  
山いまだ定められず 陵いまだ有らざりし前に我すでに生れたり』

(箴言第8章22節～25節)

御子・主イエス・キリストも又、神に依って造られたる御方である、と記してありますが、神は唯一、神は自らを父なる神・子(キリスト)なる神・聖霊(御霊)なる神と、御自身を自在

に 顕す事、即ち職分を示現なされる御方であられる事を、我らは明確に識る必要があります。  
神は唯一であります。

神のご計画である人々の救いが完結致しました時、キリスト様は、諸々の権能・権威・  
権力を父なる御神にお返しする事が、コリント前書第15章24節から28節に明記されており、  
神は唯一となります。

此の地上にお見えになられた主イエス様は、◎『我はわが父の名によりて来たりしに、汝  
等われを受けず』(ヨハネ5:43)と、父の名前が“イエス”であられる事を明言しておられ、  
また◎『助主すなわちわが名によりて父の遣したまう聖霊は、汝らに萬の事を教え』(ヨ  
ハネ14:26)と、聖霊の名が同じ“イエス”である事を示しておられます。

父も子も聖霊(御霊)も、その聖名は“イエス”であります。

然るに、世間に迎合する多くのキリスト教では、“イエス”の聖名をなるべく使わないよ  
うにして式典など始まりの宣言では“父・子・聖霊の名に依って”と、イエスの聖名を用い  
ず、避けているとしか思えません。

サタン(悪魔)は、人間よりも真の神イエス様を熟知しております。

それは、我等の神様もサタンも霊界の存在であり、サタンはやがて終末が来て、神がサ  
タンとその一派を根刮ぎゲヘナ(地獄)に叩き込む事を十分に承知しているからであります。  
サタンが、神の真の名“イエス”を嫌悪する由縁であります。

神の御子、我らの主キリスト・イエス様は、我ら神を信じて御救いを戴いている者に対  
して、◎『彼らを兄弟と称うるを恥とせず』(ヘブル2:11)と仰有っておられます。

それは取りも直さず、此の地上にお見え下さって我らの罪・咎を贖って下さった主イエ  
ス様が、将来、罪を赦された私たちが神の国へ神の子として迎えられ、父なる神の御許で  
兄弟・姉妹となる事をご承知であられるからであります。

神ご自身も御子も、“愛”の御方であります。

十字架にお掛かりになっておられる最中の主イエス様の御心には、お痛み・お苦しみも  
然る事ながら恥をも厭わず歓喜で満たされていた、と記されております。(ヘブル12:2参照)

神が我らと同じ肉と神経を持つ人間として此の世に顕れ、十字架に釘打たれ全体重を  
其処に掛けての死に至るまでの主様の御心は、永遠を偕にする者達(私たち)の事で一杯であ  
られたのです。

何故そこまでして、私達みたいな肉欲の欲望にどっぷりと浸かっている異邦人の為に、一番  
厳しい極刑にお生命を懸けられたのでしょうか？

それこそが真の“愛”である事を、主は御救いに与っている我らに教えて下さっておら  
れます。

嘗て我ら異邦人は、神の敵としての存在でありました。

ロマ書第5章10節、コロサイ書第1章21節、ヤコブ書第4章4節及びエペソ書第2章1節等々、  
枚挙に遑が無い程に聖書に記された神と無限の距離を置いていた異邦人に対して、その儘  
放置するに堪えかねた主イエス様は、ご自身でその罪を贖い、偕に永遠を生きる為にあの  
十字架の極刑を志願なされたのであります。

聖書を通して神が示す“愛”とは、敵対する者の為に、生命を賭して偕に生きようとする行為であります。

我ら神の子に取って大切な事は、神の御言に従うことであります。

新約聖書の時代に成って、神様が一番強く意図して我らに求めておられるのは“愛”であります。

旧約聖書に示された六百以上もの戒律に付いて、それらの総ては“愛”の中に内包される(ガラテヤ5:14)もので、主イエス・キリストの十字架の御業に依って表された“愛”を以て戒律の終了となった、とロマ書第10章4節に記されており、新しき誠命としてヨハネ傳第13章34節

◎『われ新しき誠命を汝らに与う、なんじら相愛すべし。  
わが汝らを愛せしごとく、汝らも相愛すべし。』

世界中に自称クリスチャンは溢れており、又キリスト教の教義を国是としている国もあるようですが、主イエス・キリストが全人類に向けて仰有った此の“愛”は、一体どう成っているのか？

嘗てキリスト教徒を自称する者達は、その歴史の中で十字軍に代表される自らを尊ぶ独尊主義の下、教理や神学・真理が異なる国や集団の人命を軽視し、多くの人民を長年に渡って殺傷して参りました。

実は新約聖書を通して、神が人々に向かって、敵と戦え殺せと仰有った事は一度も御座いません。

◎『愛する者よ、自ら復讐するな、ただ神の怒に任せまつれ。録して  
【主いい給う、復讐するは我にあり、我これに報いん】とあり。』

(ロマ書第12章19節)

主イエス様がお示し下さった十字架の御業を、人間の間に置き換えて、どのような背景を想像してみましても、絶対と言って良いほどに有り得ない行為としか思えません。

全く人間には有り得ない“真の愛”の形の中に、主イエス様はお生命を棄てて切り込んで下さいました。

主は私達に向かって、我(主)に倣う者と成れ、と仰有います。

私達が今、一番大切に致さねばならぬ事は、申すまでも無く、神を愛し、自分を愛する如くに隣人を愛することあります。

隣人とは、私たちが日々の生活で触れ合う人々の事あります。

此の神の新しき誠命で大切な事は、自分を愛する事あります。

日本人には、クリスチャンでありながら自分を愛するなんて飛んでも無いと思っている人がおられますが、これは間違いです。

本物のクリスチャンならば、神はその人の罪・咎の為に十字架上に生命を懸けて贖われたのであり、その者は神様から愛されている人なのです。

神の聖言に随う信仰の中に、自分を大切にすることを加えて下さい。

自分を大切に出来ない者に、他人を愛する資格は御座いません。  
神様が聖書を通して全世界の人々に、そう仰有っておられます。

人間は此の地上での生活以外の世界を識りませんから、人間としての生命にふっと気が付いた時から生活が始まり、多くの者は社会構成を為す大衆の一員となって、その生命の尽きる日まで生きていくに過ぎません。

そんな中、人々に対する人間の弱点を知り尽くしたサタン(悪魔)の甘言を含む誘惑が始まります。

宗教であります。

総ての人間には神が、その創造の折、

◎『神はまた 人の心に永遠を思うの思念を賦け給えり』

(伝道之書第3章11節中の句)

つまり、神は人間をお造りになられた時、その心の中に“人間は死を迎えたら全てが終わった訳では無く、その先が有る”との思念をインプット為さいましたので、死後にも何か有る事だけは解りますが、それがどのような世界であるか、またどのような状態に成るのかは決定的には解らず、ただ死後を怖れている事は事実であります。

故に多くの人々は、真の神とは相反するサタンの誘惑に乗せられ宗教の道を選びます。

キリスト教だって宗教では無いか？と質問を受ける事があります。

本物のキリスト教に付いてならば、私は責任を以て此のご質問に答える事が出来ます。

聖書通りのキリスト教とは、聖書に示された聖言を神から我らに与えられた指導書として受け止め、先ず、“水と霊”(ヨハネ3:5)のバプテスマを受けて、神の国に新しく生まれる事から始まります。

神を信じて随う者達の集う教会とは、今の時代、イエス之御霊を仰ぎ見てその導きに従い、常に異言での禱りを為し、為す所の凡ての事をみな主イエスの聖名によって行い、安息日を尊び、真心からの感謝を以て什一献金を神にお献げする、此等を遵守する教会であります。

神の御躰なる教会の首は主イエス様であり、常に主が信者の熱心なる禱りと願いに聴いてお応え下さる教会でなければなりません。

人間的な思惑を一切排除し、全幅の信頼を神に置いて、常に祝福と恩寵と憐憫が降り注がれ、平安・喜悦・感謝に満ち溢るる聖徒方であり教会で在らねばなりません。

此の教会に入信する切っ掛けの多くの者は、福音を語る者の導きに依るものでありますが、神の御旨は、

◎『御前にて潔く瑕なからん為に、世の創の前より

我らをキリストの中を選び、御心のままにイエス・キリストに由り  
愛をもて己が子となさんことを定め給えり。』

(エペソ書第1章4,5節)

“御救い”は、神の決定事項である、と記しております。

もう一カ所、私たちが神の子供であるとの聖言を記します。

◎『御霊みずから我らの霊とともに我らが神の子たることを証す。

もし子たらば世嗣たらん、

神の嗣子にしてキリストと共に世嗣たるなり。』

(ロマ書第8章16, 17節)

正当な教会に所属する信徒達は皆、神とキリストの中に選ばれた者達であり、言い換えれば、私たち聖徒は自分の意志で信者に成ったのでは無く、未だ地球が創造される以前から、末の世に起こる聖霊のリバイバルの時代に、神の子となる事が決定されていたのであります。神と御子イエスの我らに対する“愛”こそは、本物であります。

これから御救いに与る方々に申し上げたい事は、世の中には濱の真砂ほどの宗教がありますが、地球が出来る前から神の御救いに与り永遠の生命が定められている、と言う話を聞いた事がおありですか？

そして未だ何も知らないにも拘わらず、試験も無しに行き成り神の国に誕生し、キリストと共に神の世嗣として定められていると言うのです。

その要旨は、神の御霊を受霊して御霊に従った生活をしている者は、キリストと共に父なる神を“アバ父”と呼ぶ事が赦されており(ロマ8:15)、紛れも無くキリストと共に世嗣である、と言う事であります。

神は、己を否み給うこと能わざる御方であられ、一度お決めになられた事は必ず成就なさいます。(テモテ後2:13)

私たち選ばれて神の子とされたとは言え、肉の世に在っては罪を犯して仕舞う事がありますが、主は其処にも救済の手を打っておられます。

◎『人もし罪を犯さば、我等のために父の前に助け主あり、

即ち義なるイエス・キリストなり。』(ヨハネ第一書第2章1節)

此の聖言の裏付けが、ロマ書第8章34節にあります。

此のように神は、私たち一旦は救われた者が罪を犯す事に成ったとしても、何とかして神の国と一緒に生活する事を願っておられるのです。

神様の“御愛”は、何処までも本物であり非の打ち所がありません。

現代、神は私たちに向かって、私が貴方を愛したように互いに愛し合いなさい、と新しい誠命として仰有っておられます。

更には、私に倣う者となれ、また私に似た者となれとも仰有います。

主イエス様は、形式的では無く、それこそ敵対する者の為にお生命を棄て、その者達に永遠の生命をお与えになられた御方であられます。

神の子供として今、私たちに一番大切な事は、主がお生命を棄てて迄して実践教育をして下さった“愛”に基づく行為・行動であります。

貴方は一番嫌いな人の為に、生命を棄て、助ける事が出来ますか？

<sup>あなた</sup>貴方は今、神様を誰よりも、何よりも一番愛しておられますか？

<sup>あなた</sup>貴方は今、神様に愛されている自信がありますか？

私たち神の子の目標は、神に倣<sup>なら</sup>う者・神に似<sup>に</sup>た者となる事であります。

ハレルヤ！ <sup>ねが</sup>願わくは、我ら神の子を<sup>さと</sup>聡明者として下さい。アーメン

(2019・1・4 伊豆イエス之御霊教会 牧師 三崎 紘 文責)